

泰山府君

世阿弥作

前

ワキ 桜町中納言

シテ 天女

後

シテ 泰山府君

地は 京都

季は 三月

「是は桜町の中納言とは我事なり。わが好ける心にあくがれて。青陽の春の朝には。花山に入つて日を暮らし。秋は龍田の紅葉ばの。色に染み香にめで。情を四方にめぐらせば。心に洩るゝ方もなし。されども妙なる花盛。三春にだに足らずして。唯一七日の間なり。余りに名残惜しく候へば。泰山府君の祭を執り行ひ。花の命を延べばやと存じ候。有難や治まる御代の習ひとて。何か望みは荒磯海

の。浜の真砂の数々に。年を尽すや栄花の家。

「花の命を残さんと。く。是も手向と木綿花の。白木綿懸けて緋桜の。影明らかに春の夜の。月の光りも曇らじな。金銀珠玉色々の。花の祭を急ぐなり。く。

「花におり立つ白雲の。嵐や空に帰るらん。

「天つ風雲の通路吹きとぢよ。乙女の姿しばしだに。とゞめかねたる春の夜の。色香上なき花盛。よそ

めの色も面白や。

地「いざ桜。われも散りなん一盛。く。誘ふ嵐も心
して。松に残る薄雪の。盛とも夕暮の。月も落
ちくる天の原。霞の衣来て見れば。妙なる花の気
色かな。く。

シテ詞「あら面白の花盛や。何ともして一枝手折り天上へ
帰らばやと思ひ候。花枝眼に入つて春あひ得ず。
花一枝を手折らんと。忍びく^くに立ち寄れば。

ワキ「春夜一時値千金。花に清香月に陰。見る目ひまな
き花守の。鼓を数へ待ち居たり。

シテ「折らばやの花一枝に人知れぬ。我通路の関守は。
宵々ごとにうちも寐よ。

ワキ「寐られん物か下枕。花より外は夢もなし。

シテ「実にく^く見れば木の本に。人を寄せじと花の垣。
ワキ「隔てぬ月の影ともに。

シテ「花の光の。

ワキ「照り添ひて。

地「中々木陰はくからねば。何と手折らん花心。月の夜桜の。影あさまなり恥かしや。

ロンギ地「実に有難や此春の。く。花の祭の時過ぎば。今少しこそ松の風。終には花の跡とはん。

シテ「今手折らずは一枝の。後の七日を松の風。雪になり行く花ならば。跡とふとても由なし。

地「よしや吉野の山桜。千本の花の桜町。

シテ「月も折しも春の夜の。

地「霞の光。

シテ「花の影。

地「何か今宵の。思ひ出ならぬさりながら。あはれ一枝を。花の袖に手折りて。月をも共に詠めばやの。望みは残れり。此春の望み残れり。

シテ詞「うれしやな月が入りて候ふさりながら。手折るべき便りなければ徒に。更くる夜の間を待ちつるに。

地「うれしや月も入りたりや。く。今は上こそ花盛。

木の下闇に忍び寄り。さしも妙なる花の枝。手折
りて行くや乙女子が。天の羽衣立ち重ね。天つ空
にぞ帰りける。く。 (中入)

後ジテ「そもく是は。五道の冥官泰山府君なり。

詞「我人間の定相を守り。明闇二つを守護する処に。

上古にも聞かざりし。花の命を延べん為め我を祭
る。唯色に染む一花心とは思へども。よくく思

へば道理々々。煙霞跡を埋んでは花の暮を惜しみ。

佐国まさに身を捨て、後の春を待たず。斯かるた
めしも有る花を。手折れる者は何者ぞと。通力を
以てよく見るに。欲界色界無色界。化天耶摩天に
てもなきが。らくへん下天の天人が。此花を折つ
たよ。

地「山河草木震動して。虚空に光り満ち満てり。

シテ「天上清しと見る所に。何ぞ偷盗の雲の上。

地「天つ乙女の羽衣の。花のかづらの春を待て。

シテ「待たじはや待たじはや。

地「花一時の栄花の桜。

シテ「かざしの花のたまくなるに。

地「花実の種も中空の。天つ御空は雲晴れて。らく

へん下天は顕はれたり。天女はふたゝび天降り。

く。さしも心に懸けし花の。かづらもしぼむ

涙の雨より。散りくる花を慕ひ行けば。

シテ「天上にてこそ栄花の桜。

地「散り来て何か残りの雪の。消えばや花も命の定め。

梵釈十王閻魔宮。五道の冥官泰山府君の。力を種

の継木の桜。あつぱれ奇特の花盛。

シテ「通力自在の遍満なれば。

地「通力自在の遍満なれば。花の命は七日なれども。

もとより鬼神に横道あらんや。花の梢に飛び翔つて。嵐を防ぎ雨を漏らさず。四方にふさがる花の

命。
七日に限る桜の盛。三七日まで残りけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第三輯』大和田建樹 著